



史料室だより  
第4号  
1982・10・10

特集・深江の歴史

編集 田辺 眞人  
発行 神戸・深江会館

生活文化史料室

〒658 神戸市東灘区深江本町3-5-17  
電話 神戸(078) 41110475

## 身近かな歴史の博物館

中央アジアの夏の旅から

県立御影高校教諭  
生活文化史料室長

田辺 眞人

数年前にイラン・イラク・レバノンなど西アジアを訪ねた私は、今夏は中央アジア——シルクロードの中央部に栄えた古都ヒワやブハラ、アレクサンドロス大王もその美しさを讃えたサマルカンドなどを訪ねた。アム河<sup>Amu Darya</sup>につきり、カラムク砂漠に寝そべる長閑な旅であったが、その途中の、かつて千年も前に遣渤海使の人々がやったように日本海を横断して、敦賀からナホトカまで船で渡り、そこからシベリア鉄道でハバロフスクに向うというおまけも魅力的だ



サマルカンドのシルドル回教学院

った。ハバロフスクからは空路でタシケントに到り、中央アジアを旅したわけである。

多くの史跡を訪ねる一方、各地で博物館を見学し、地域の歴史の展示についても見聞することが多かった。アラル海の近くの集団農場<sup>コルホーズ</sup>では、文化部の建物の二階に三つの展示室をもつ「博物館」があり、古い農具や織機・昔の農家の部屋の復元、第二次大戦の戦没者の写真などが、手づくりの展示ケースに並べられており、農場員が胸を張って「私たちの歴史です」と説明してくれたのは印象的だった。

サマルカンド東方七〇<sup>キ</sup>、山間の町ベンジケントの郷土誌博物館では、郷土出身の詩人に関する展示や考古資料にまじって、古い綿つむぎのザクリ器が私の眼を奪った。それは深江の史料室のものに酷似しており、数千<sup>キ</sup>離れた砂漠の民と、我々が一緒なのだと感じたのである。

各地で古い寺院や旧王宮の広間が、史料の展示や小学生の作品展示に使われており、人々は愛着をもつて博物館と呼んでいた。



KHABAROVSK MUSEUM OF REGIONAL STUDIES

ハバロフスク郷土誌博物館

特に印象深かったのは、ハバロフスクの郷土誌博物館で、土壌・植物・動物など自然風土の展示から、先史時代の土器・石器、少数民族の生活やロシアの開拓民の小屋など興味深い展示室が、煉瓦造り三階建ての古色を帯びた堂々たる建物の中に納まっている。どこの博物館でも誇張されたような革命と革命後の展示には、多分に政治宣伝のにおいがしたが、見学した多くの博物館で、地域の歴史が大切にされていることを痛感した。ハバロフスクでは館長に会い、話をすることができ、多忙の中を三〇分の時間をさいて下さり、その地方の調査の様子などについていろいろ話し合うことができた。今後の印刷物の交換が出来れば、など約束することもできた。

深江の史料室もいよいよ増築案が具体化しつつある。かなりの規模になる予定だが、私は一つの夢をもっている。オーストラリアやアメリカなど、太平洋を囲む各地の地方史博物館と交流したいと思っている。このような市民としての文化交流こそ、港都・神戸の一画、海に開けた深江の地方史博物館の、未来の大きな可能性だと思ふ。

# ふるさと深江の歴史

田 辺 眞 人  
長 岡 暁 子

## 深江の弥生時代

人間は、大むかし山や海にいる動物や、野原にはえている草などをとって、それを食料にして生活していました。けれども、そのような生活では住んでいる土地のまわりに食べることでできる動物などがいなくなると、住む場所を変わらなければならず、とても不便でした。

しかし、人間が食物を作れば、食物がなくなるということもなく、いつまでも同じ場所に住むことができます。このように、田畑での作物づくりが行なわれるようになったのは、今から二千年ぐらいい前で、その時代を弥生時代といいます。この近くでは森北町でその頃使われていた土器（ねんどで形づくって焼いて作った容器）や石器（石で作られた道具）が見つかっています。また本庄小学校の校庭からは、石斧（石でできたおのみたいなもので、物を切ったり、けずったり、土を掘るのに使う）や土器が出てきて、この土地で生活していた人々のくらしのようすがわかります。

最初は家族ぐらいの少人数の人が集まってくらしていたのですが、この集まりはしだいに大きくなって、やがて国ができあがります。奈良時代になると決まった広さの田を人々に与えて作物を作らせ、その作物の一部を国に税としておさめさせる班田收授

の法を行ないます。この時、人々に同じ広さの田を与えるためには、田を一定の広さごとに分けておかなばなりません。このため田を基盤の目のようにきちんと区切ったものを条里制といいます。深江駅の西側に流れている高橋川が阪神電車の北で北むきから西むきへ、さらに四百メートルほど西でふたたび北むきへ流れを変えているのはこの条里制の影響だと思われまます。

## 踊り松の言いつたえ

奈良時代から平安時代にかけて、このあたりは摂津国菟原郡葦屋郷の一部でした。

そのころ深江の西の端、今の神戸商船大学養生館のあたりに踊り松とよばれる古い大きな松の木がありました。（今でも国道四十三号線の北にある養生館の庭に踊り松の木があるのをみなさんも知っているでしょう。）奈良時代の靈龜元年（七一五）、卯月（旧暦の四月だから、今の五月ぐらいい）のある日の夜のことです。まっくらな深江の海のかなたにふしぎな光があらわれました。さらにそれを見つけて集まった村人たちの目のまえで、光は海岸に近づいて浜にある松の木の下に流れてきました。すると光の中から、「私は稲荷の神さまです。ここから少し山の方に登った森の中に祭りなさい。」という声が聞こえました。人々はよろこんで、その松の木のまわ



天保七年の摂津国名所旧跡細見大絵図

りをおどりまわって神をむかえ入れて、神さまが住むための社を作りました。これが深江の北にある森の稲荷神社のはじまりだということです。そして神さまが流れついた松は、その時から踊り松とよばれるようになりました。

また、このような言いつたえもあります。ある時ひどい大雨がふって森の稲荷神社も流されてしまいました。その時、神さまがこの松の下に流れついていらっしやったので、人々はよろこんで松のまわりをおどりまわって神さまを森につれて帰りました。そのためこの松を踊り松というようになったのだともいいます。

とにか、今から五十年ほど前までは、森稲荷のおまつりの時には深江本町四丁目にあった踊り松のところまでお神輿がくり出していました。



明治末期の踊り松

### 深江村のはじまり

今の深江本町四丁目から本庄町三丁目の一部にかけて宇薬王寺という地名が残っています。そこには、室町時代（一三九二〜一四七七）に大日如来という仏さまが祭られている薬王寺というお寺がありました。この寺のまわりの家々と、その東に住んでいた有力者・永井氏の屋敷のまわりの村がいつしよになって、戦国時代（一四七七〜一五七三）に一つの村ができました。この地は芦屋川の西につづく低地であり、その海ぞいはいりくんだ入江となっていたため、それにちなんで深江村とよばれるようになったということです。

### 正寿寺と大日さん

室町時代の文明年間（一四六九〜一四八七）に薬王寺の住職（お寺の主人）であった観空は、浄土真宗を信ずる本願寺のお坊さんであった蓮如をとても尊敬しており、寺の信ずる宗教を浄土真宗にあらためて寺の名を延寿寺とし、信仰する仏さまも阿弥陀如来に変えてしまいました。

その後、寛永十年（一六三三）に永井三左衛門が仏の道に入って修業をするために出家し、空照と名がついてこの寺の住職となった時、寺の名をまた変えて永井山正寿寺として、今お寺がある場所に移されたと伝えられています。

さて、前にお寺で信仰されていた仏さまである大日如来は観空によって寺から出されてしまったのですが、この仏さまはやがて村人にひきとられて、深江村の守り神として祭られました。これが今の阪神

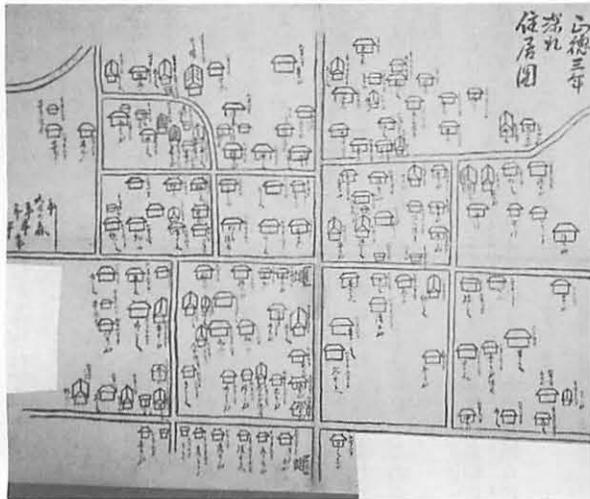
深江駅のすぐ南東にある大日靈女神社のおこりだということです。明治元年（一八六六）に神さまと仏さまを別に祭ることが決められたために、たぶんもとは大日如来を信仰する薬王寺を守るための神社だったものが別れて村の守り神となったのでしよう。

### 江戸時代のように

元和元年（一六一五）の大坂夏の陣という戦いで豊臣氏が敗けると、豊臣氏が持っていたこの土地は、江戸幕府のものとなり、さらに元和三年には尼崎藩（今は日本の国がいくつかの県に分かれているが、江戸時代は政府にあたるのが幕府で、地方は藩に治められていた。）の土地に加えられました。尼崎藩の藩主（藩の中でいちばん高い地位にあつて、藩を支配する人）は元和三年の時には戸田氏でしたが、寛永十二年（一六三五）に青山氏へ、宝永八年（一七一）には桜井氏へと代わっていきます。

江戸時代に深江村は農業と漁業が盛んに行なわれていました。村人たちは、春は田において稲を育てて米をつくり、秋には山へ帰っていくという山の神さまや、魚がたくさんとれることを約束してくれる戎さまを信じていました。深江の山の神がやどつていたといわれる祠は今でも六甲山の風吹岩の南に残っており、深江の東の浜のほうには小さな戎神社があります。

このような農村の中を、今の国道二号線の近くに松並木が続いていました。それが、諸国の大名が江戸（今の東京）へ参勤交代（大名が一年おきに江戸で住むこと）に出かける時に通った西国街道です。街道の道ばたには、御影では一里塚（街道に一里、



正徳3年(1713)の深江住居図

つまり四キロメートルぐらいいごに土を少し高くもった塚を作って、旅をする人が距離を知ることができるようにしたもの)が作られ、住吉には茶店もありました。さらに海の方へおると、だいたい、今の第二阪神国道にそって浜街道とよばれる道にぎわっていました。とくにこの地方は、江戸時代の商業の中心地である京都や大坂に近く、しかも街道のまわりにあるため、江戸時代のはじめごろからかなりいろいろな産業が行なわれていました。たとえば、六甲山の中にある流れが急な川を利用した水車(水の力によってまわるようになっていた車)を使う産業がさかに行なわれ、その水車をはじめは菜種の油をしばり出すために使われていたのですが、あとになってからは精米(もみを取っただけの



明治18年の深江地方

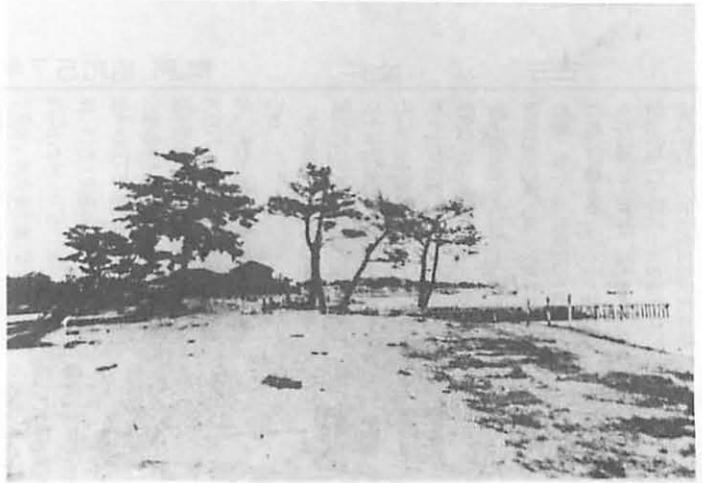
米をついて白くすること)にも使われました。それとともに、魚崎や御影などでは酒造業(酒を作る産業)が発達して、そこで作られる灘酒は天保期(一八三〇〜一八四三)ごろになると、伊丹や池田で作られるお酒にかわって有名になります。また、水車場で米などをつくのに使った白の石は、御影や住吉の山の中から切り出されて各地に売られ、御影石という名前で人々に知られるようになりました。この酒や石は御影や魚崎の港からいろいろな地方に送り出され、青木や深江は漁村としてにぎわいました。いっぽうで、明和六年(一七六九)には、深江は青木・中野の一部・西青木・横屋・魚崎・田中・住吉・御影・石屋・東明といっしょに幕府の土地(天領)となり、明治時代をむかえることになりました。

### 明治時代になって

江戸幕府にかわって天皇を中心に中央集権的な明治時代がはじまります。明治元年(一八六八)五月には深江のまわりの天領は兵庫県となり、尼崎藩に入っていた村々は明治四年七月に尼崎県とあらためられます。さらに同じ年の十一月になると尼崎県は兵庫県の一部となります。明治十一年には兵庫県の中にひとつの区と三十三の郡が作られ、深江はその中の菟原郡にふくまれます。やがて明治二十二年になると東灘の地域に次にあげる五つの町や村ができます。

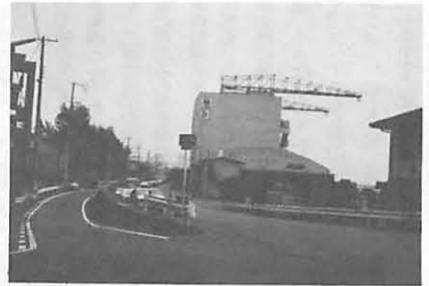
- 本庄村：深江・青木・西青木
- 住吉村：住吉だけ
- 魚崎村：魚崎・横屋
- 御影町：郡家・御影・東明・石屋
- 本山村：森・中野・小路・北畑・田辺・田中・岡本・野寄

この間に、明治七年には大阪と神戸の間に鉄道が通り、住吉に駅が置かれ、明治二十二年になって今の東海道本線がすべてできあがりました。さらに明治三十八年に阪神電車、大正九年(一九二〇)には阪急電車、そして昭和二年(一九二七)の阪神国道電車とつぎつぎに電車が動きはじめます。これによってこの地方は大阪市や神戸市とますます深いつながりを持つようになりました。このような変化もあって農村の人口はだんだん増加し、江戸時代からはじまった産業もどんどん成長して浜辺には少しずつ工場が建つようになり、住吉や御影は住宅地となります。



大正初期の深江浜

しかしながらこのように発展する一方ほうでは、その発展をささげるようなできごとも起っています。昭和十三年の阪神大水害では、住吉川や石屋川の水があふれてまわりの町々を水びたしにしてしまいました。また第二次世界大戦中の昭和二十年五月十一日の空襲（たくさんの爆弾を落とされること）は、東灘のほとんど全部を焼きつくしました。この空襲は青木の浜にあった飛行機工場をこわすために行なわれたもので、工場には二七〇発、となりの商船大学には三〇発の爆弾が落とされ、死んだ人は一二〇三人、けがをした人は八二四人にものぼりました。



深江南町4丁目の70年後の現在。上と同じアングル。ジェーン台風（昭和25年）後、旧海岸線に築かれた防潮堤（中央）をこえて、右側には昭和45年の埋め立て地がのびている。

生活文化史料室

今の深江は、このようなひどい状態からたちなおってきた新しい町です。しかしそれにもかかわらず、町のいろいろな所に長い年月の間に作り出された歴史が残っています。そんな歴史や、人々が生活していくうえで使われた道具などをなくならないように集め、見学のための部屋を作りました。それが「神戸深江会館生活文化史料室」です。みなさんのご両親やおじいさん、おばあさんが子供だったころ使っていたしやつた食器、おもちゃ、教科書や、昔の戦争に使われた鉄砲や洋服、さらに明治時代ごろにお医者さんが使っていた道具など、今の生活からはとても考えられないようなおもしろい物がたくさんあります。教科書などには書かれていないこんな身のまわりの歴史に興味のある人は、気がるにこのお部屋に勉強に来てください。お部屋は、毎週土曜日と日曜日の午前十時から午後五時まで見ることが出来ます。

好評『神戸の歴史ノート』

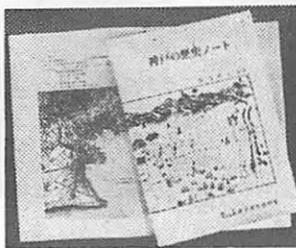
郷土史への関心が高まり、学校教育にも取り入れられようという昨今だが、神戸の通史の参考書は意外に入手困難。落合重信先生の名著『神戸の歴史』もすでに絶版で書店で買えない。

そこで、勉強会や自修用のサブノートに、と生活文化史料室は、本書発行を計画。神戸市職員研修所と市の健康教育公社の大きなご協力を頂いて公刊が実現し、ジュンク堂・海文堂・白鷗書房・すま書房・大丸など有名店で発売中。ぜひ、お知りあいの方々にお勧めください。

掲示板

「神戸の歴史ノート」発行

郷土学習のサブノート（補助教材）「神戸の歴史ノート」Ⅱ写真Ⅱが、神戸深江会館生活文化史料室から発行された。編者は田辺真人御影高教諭。中2で学ぶ「私たちの神戸」あるいは高校で来年から指導要項にはいった「地域社会の歴史と文化」で歴史の大筋をつかむため、時代別に領有関係、統計、図版などを整理したもの。この一冊で神戸の歴史の流れをつかめるくふうをこらしている。週刊誌大（二〇）が、二百円。神戸市東灘区深江本町三ノ五、深江会館生活文化史料室と中央区中山手通四ノ一〇、神戸市健康教育公社で発売中。



昭和57年8月13日（金）  
神戸新聞朝刊から

好評

# 三三民俗博物館

## 神戸・深江会館生活文化史料室

町の人がおぼえて作った。三三民俗博物館が神戸市東灘区深江本町三丁目五十六のオープンして一年半。見学者名簿に記帳した人だけでもすでに千七百人を超えた。この「生活文化史料室」を管理する深江財産区管理会（会田垣正雄会長）では早くも大がかりな増改築を計画。地域の生活文化を大切にしようという関係者の熱意が、より大きな実を結ぼうとしている。

生活用具、農・漁具などの持ち込みもふえた。地域の消防団、婦人会、個人からの寄贈は切れ目なく続き、今では開館時の倍の二千点。これは食器ひとそろえや教科書を二括したのも一点の助定だから、小物すべてを数に直すと数倍になるだろう。

ちが、身近な生活文化に目を開きたい意味も大きい。こうした確かな手ごたえに田辺さんの夢はふくらむ。「人がふえ、物がふえと、とうてい八十平方メートルの展示室では間に合いません。財産区管理会の人たちが、おカネのことは気がねなしにやってくなはれ」と後押しして下さるので、いま増改築プランを検討してもらっているんです。構想によれば、一階に導入部として昔の生活を再現、資料を集める契機となった村誌編集室を置く。二階は現在の民具展示室と地域に親しみのある神戸商船大の海事資料展示室、それに出来れば現代室。三階は今もエニークな医事史料の展示室と特別企画展示室、小さな研修室を……と三階建て、スペースも五倍の「生活文化センター」にしたい、という。



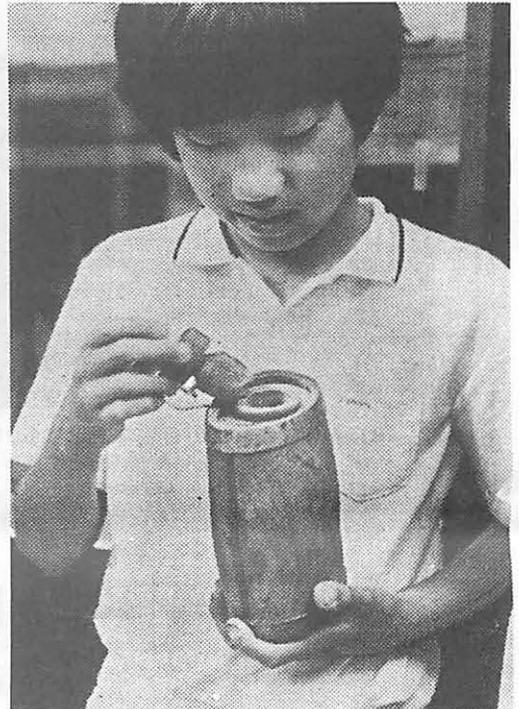
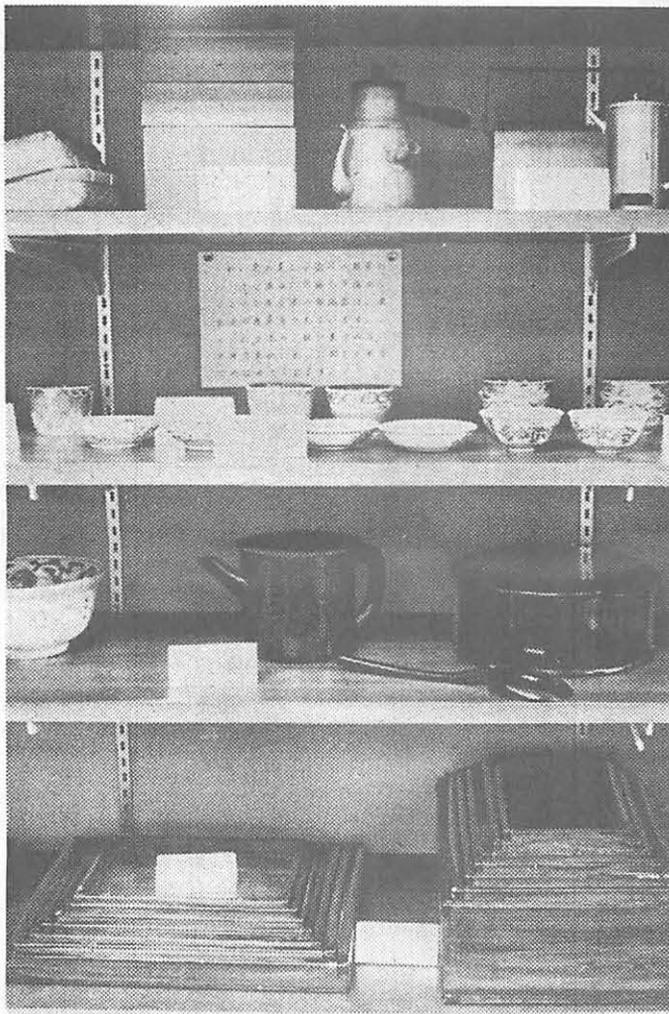
大日靈女（おひるめ）神社の境内に立つ深江会館の別館二階に八十平方メートルの同史料室が開館したのは昨年二月二十一日。翌日から見学者が相次いだ。幼稚園の先生たち、働く婦人の家、学校厚生会、地元本庄小三年生二百人、室長の田辺真人さん（県立御影高校教諭）も「土、日曜だけなのに、これだけ集まるとは」と初めのうちは信じられない面持ち。だが、いつの間にかペースが落ちないばかりか、小学生からお年寄りまで幅も広がり人数も目に見えてふえていく。

一方、友の会も現在百七人。灘の酒蔵と周辺の史跡探訪、二階建てバスによる市内歴史ツアーなどの積み重ねが、着実に輪を広げている。これまで歴史とはむずかしい学問だと思込んでいた人た

「小学生の郷土学習に加えて、学習指導要領の高校日本史も、地域社会の歴史と文



生活文化の歩みを跡づける展示室。田辺室長（中央）の説明も懇切丁寧だ。いずれも神戸市東灘区深江本町三丁目



「へえー、うまいこと考えたなあ」。木製水筒に昔の生活と知恵をしるぶ小学生

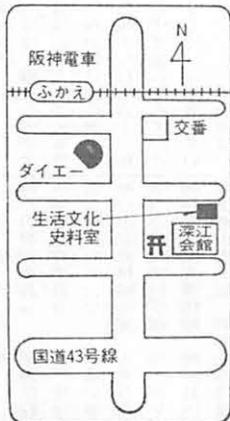
化が来年度から一つの柱になります。足元の歴史を重視しよう、ということですが、地域の人たちも自分たちの生活文化の流れに愛着と誇りを持ってこられたので、ここ(資料室)の役割は、もっと重くなります。まさに八地域の盛り上がりVを絵に描いたような動きである。

# 暮らしの歴史に興味

見慣れたはずの漆器、陶磁器にも時代の流れがまざまざ。暮らしの中の文化財と

記事 有井 基  
写真 笹田 一郎

|                                                     |                                                                                                                                           |
|-----------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>入会のおすすめ</p> <p><b>神戸史学会</b></p> <p>(代表 落合重信)</p> | <p>機関誌「歴史と神戸」(隔月刊)</p> <p>会費・年額 2,000円(1~12月分前納)</p> <p>〒653 神戸市長田区川西通3丁目8</p> <p>太陽印刷内 ☎(078) 691-2085</p> <p>振替口座 神戸4018</p>            |
| <p><b>井上郷土玩具館</b></p> <p>(館長 井上重義)</p>              | <p>10時~17時 毎週水曜休館<br/>(祝日は開館・翌日休館)</p> <p>姫路駅から⇒国鉄播但線で23分の香呂駅下車<br/>東へ徒歩10分。</p> <p>〒697-21 兵庫県神崎郡香寺町中仁野671-3</p> <p>☎(07933) 2-4388</p>  |
| <p><b>神戸華僑<br/>歴史博物館</b></p> <p>(館長 陳 徳仁)</p>       | <p>9時~17時(年中無休)</p> <p>大人 300円 学生 200円(10人以上団体割引有)</p> <p>国鉄元町駅 西口から南へ5分の海岸通角</p> <p>〒650 神戸市中央区海岸通3丁目東南角<br/>KCCビル2階 ☎(078) 331-1277</p> |



# 楽しかった野外映画のつどい

佐野末夫

七月二十五日夜

「パパ、あのパビリオンへ入ったなア」

「こっちのパビリオンも行ったやろ」

親子の楽しい会話を耳にし、前日の長崎豪雨に心

いためながら「ポトピア'81」の記録映画を見た。

七月二十五日、例年なら真夏の暑い日のはずだが、

ウチワも使うことのない雨のやみ間（大日神社で野

外映画の集いを開くので、天の神がじゃ口をお

さえてくれたのかも……）、一五〇名以上の大人と

子どもが、生活文化史料室の先生やお兄ちゃんがプ



1982. 8. 29(日) 神戸港めぐり船の旅  
神戸の夜景を見ながら歴史を語ろうと、  
200人あまりの人々が参加した。

ログラムを組んでくれた。野外映画の集いを楽しんだ。昔ばなしのマンガ「カチカチ山」「花のき村とぬすびとたち」や「ポトピア'81」の記録映画を見ながら、昨年の今頃は……と、ポトピアに思いをはせた人たちはばかり。

子どもたちにとつても、夏休みの日記に書き加えられた楽しい一日であったことと思う。平素はテレビの前に座りこも子どもたちに、野外のすばらしさを教える場として、これからもよいプログラムをつくっていただきたいと願ってやみません。

## 友の会・新入会の方々（敬称略）

- 岡本 真一 小播 次照 篠木 章子
- 野田 正蔵 志智 貞子 田部美知雄
- 生駒 育子 大田みつえ 沢井 崇子
- 山口 房子 小網 糸い 望月 浩

新入会十二名（会員合計百八十五名）

## 友の会会員募集中

年間会費千円を前納して下さい。史料室の催し案内や、郷土の歴史の本を届けます。たのしく歴史を学ぶリッチな行事に参加できますよ。お問い合わせは史料室員まで。

郵便振替：神戸三二四四〇八深江会館史料室友の会

### ――編者から――

史料室の二年度も残りわずかですが、見学者は二千人をこえる勢いです。夏休みの絵日記に書くのと来られた親子づれの方や、新聞で見た孫の中学生に連れて行けとせがまれました。と話されていたおばあちゃん、ミニ博物館はいかがでした。友の会の会員数は奇妙なことに、ずっと見学者の二割というペースで増加して、約二百

名の大所帯、歴史を身近なものとして感じて頂こうと企画される幹事さんも大変ですが、今年も八月の船の旅。十月の魚屋道を歩く会など多彩な催しでした。八月に史料室から発行した「神戸の歴史ノート」は、マスコミ関係の方やインフォメーション神戸、市内の有名書店のご協力で、予想をこえて好評、どこかこういうものを出さねばならないと思えます。史料室だより第四号、深江の地域史を小学生諸君にも読んでもらえるように、と作りました。いよいよ狭すぎるという声に押されて、史料室増築計画が具体化しようとしていますが、地域社会の歴史と生活文化の歩みを学べる、一層立派な郷土の歴史博物館の完成のために、お智恵とお力をお願いいたします。今秋の神戸市立博物館、米春の県立歴史博物館と、兵庫県にすばらしい施設がオープンしますが、わが街のミニ歴史博物館もいよいよ個性を発揮して成長です。（眞）

### 協力団体

- 神戸市教育委員会 東灘区役所
- 芦屋市教育委員会 神戸史学会
- 国立神戸商船大学 武陽史学会
- 神戸市立森林植物園 大丸百貨店
- 明石市立天文学館 サンテレビ
- 神戸華僑歴史博物館 神鋼社内報
- 井上郷土玩具館 御影高校地歴部
- 深江青少年協議会 神戸共同印刷
- 深江ジョッピングセンター

### 史料室役員（五十音順）

#### 理事

- 大田垣正雄 岡田龍太郎
- 志井 正雄 志井 保治
- 田辺 真人 中尾 久一
- 松尾 福夫 深山 健二

#### 調査員

- 赤松 豊子 天田 晃司
- 伊東 玲子 尾崎 京子
- 小野山和子 金原 浩司
- 北島もと子 嵯峨山英樹
- 谷口美登里 永井 真治
- 長岡 暁子 藤田 望
- 三浦 文子 結城 正福

#### 友の会幹事

- 小嶋 悦郎 志井 保治
- 寺岡 一夫 門前 喜康
- 渡部 永子 （以上常任）
- 植本 敏紀 植本笑美子
- 大川 弘 佐野 末夫
- 佐原 浩平 清水 久雄
- 多田 康治 田辺ゆかり
- 納多 春雄 門前 寛子